

LUMINOUS RED

ルミナスレッドの容貌 大和 美緒

大和 美緒 | Yamato Mio

言葉の作品で求める構成のバランスは、音楽で例えると、“電気グルーヴ”とか“ゆらゆら帝国”、あと、少し好みはズレるけれど、“きゃりーぱみゅぱみゅ”の曲も構成も、求めている所に近い。サウンドはエッジがキレキレで超絶カッコいいのに、それに反比例して詩の意味が恐ろしくダサかったりするそのバランス感覚が、最高にカッコいいと思う。

[C.V.]

1990 滋賀県生まれ
2013 京都造形芸術大学・美術工芸学科総合造形ゼミ卒業
- 現在、同大学院・芸術表現専攻に在籍

[展覧会]

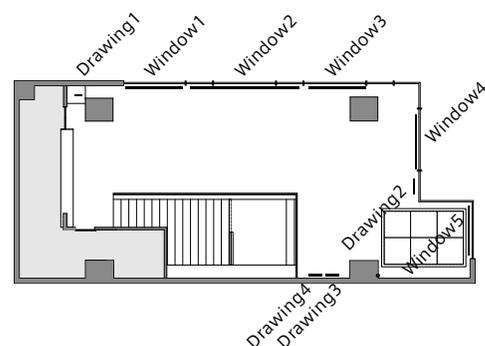
2012 京都造形芸術大学 総合造形ゼミ4回生展 「宙」ただよう思考展・ART ZONE / 京都
- キネキテル・Antenna Media / 京都
2013 京都造形芸術大学 卒業展・京都造形芸術大学 [con] Temporary commune・Gallery PARC / 京都
- 持ち腐れだと、誰が言った。・つくるビル / 京都
- art award tokyo marunouchi 2013・行幸地下ギャラリー / 東京
- キテ・ミテ中之島 ミテ・キテ ミュージアム 2013・京阪電鉄 中之島駅 / 大阪
- ULTRA AWARD 2013・ART ZONE / 京都

[受賞歴]

2013 art award tokyo marunouchi 2013 高橋明也賞
- ULTRA AWARD 2013 オーディエンス賞

展示作品 | works

Window1: あのイーハトーヴォの
Window2: Alexander McQueen A/W2013 るんるん
Window3: Superdry japan るんるん
Window4: ゆらゆら帝国 III るんるん
Window5: ルーノオ・スーノオ・ユニヴァース
インスタレーション: いずれもガラス窓にアクリル絵具
Drawing1: Drawing "LUMINOUS RED" # 1
2014 ガラス、アクリル絵具 175×200mm(額)
Drawing2: Drawing "LUMINOUS RED" # 2
2014 ガラス、アクリル絵具 270×400×5mm
Drawing3: もりのなかで # 2
2013 紙に鉛筆 790×600mm(額)
Drawing4: もりのなかで # 3
2013 紙に鉛筆 790×600mm(額)
entrance1: Superdry Double Black Label るんるん
2014 ガラス、アクリル絵具 360×593×5mm
entrance2: KIVET どきどき
2014 ガラス、アクリル絵具 360×593×5mm



Gallery PARC [グランマーブル ギャラリー・パルク]

〒604-8082 京都市中京区三条通御幸町丹波石町48 三条ありもとビル[ル・グランマーブル カフェ クラッセ] 2F

【Tel&Fax】075-231-0706 【Mail】info@galleryparc.com 【HP】http://www.galleryparc.com

-展覧会について

私が生きている確固たる証拠。死んでいない証拠。

-作品をつくることは

私が生きている証拠。死んでいない証拠。

-人に見せることは

自分の輪郭を確かめる行為。

-自分の作品(行為)について

文字の集積による作品については私の個人的な情性とその贖罪が、あの行為に繋がっています。何と呼んでいいかわからなくて、絵画と、彫刻と、インスタレーションの間。デザインでは無い。

-書くコトバ(文字)について

その時々によって違うけれど、なるべく、ポジティブな状態を表す言葉を沢山書こうと思っています。沢山文字が集まっているだけで執着心という形ができるのに、そこにネガティブな言葉を乗せてしまうと、“呪い”になってしまう。それは違う。

-描くピクト(図像)について

ルールは特に決めていませんが、普段生きてたら、何気なくとも大量のビジュアルが目に入って来ると思うんですけど、その中でも、感覚に引っかかってしまうものがあると思うんです。例えばそれが、朝焼けや紅葉だと言う人もいれば、マネキンが着てるTシャツの柄だったり。そういうものの集積が、人のセンスや好みをつくるし、生きるための栄養になると思う。じゃあ、私の栄養って何だろう、と日常的に考えていて、その中で感覚に引っかかったものを集めているものが描く絵になる事が多いです。

-作品について

良い作品だと思うものは、個人の精神性や興味、人間性といったものが具現化した状態のもの。「ジョジョの奇妙な冒険」でいう所の“スタンド”のようなポジション。

-自分の見たいカタチとはどんなものか

生きている人間がつくり出す事が出来るリアルなカタチ。楽しみと絶望の両方が混ざった、リアルなカタチ。

-何が美しいか

PCの横で飼っている金魚と水草。

-何が醜いか

食べた後の食器が洗わずに放置されている状態。たばこの吸い殻いっぱい灰皿が部屋に放置されている状態。

-何がカッコいいか

今年の5月に、Chris Clarkのステージを見たんですけど恐ろしいエクスタシーを感じました。あと、映画“AKIRA”もめちゃくちゃカッコイイ。絶望が、リアルに、徹底した美意識の元に具現化されていて最高にカッコいい。

-何がカッコわるいか

煮ても焼いても食えない言い訳。

-何が気持ちいいか

目の前に、カッコいいものが現れた時。

-何が気持ち悪いか

人にお金を借りている状態。

-何を望んでいるか

生き抜く事。

-何を恐れているか

腐る事。何も無い事。死んでしまう事。

-楽しいことは

人と美味しいものを食べ、楽しいお酒を飲んでいる時。

-苦痛は

「作品の意図は？」とストレートな質問に答えなければならぬ時。自分の作品を前に、形式ばったプレゼンテーションをしなくてはならない時。あと、楽しいお酒を飲めない時。

展覧会について | Exhibition

大和 美緒(やまと・みお / 滋賀・1990~)は、2013年に京都造形芸術大学を卒業し、現在は同大学大学院・芸術表現専攻に在籍する若手クリエイターです。

2012年より「コトバとピクト」による作品展開に取り組んでいる大和は、例えば『るんるん』というコトバ(文字)をひたすらに書き連ねることで、そこにあるピクト(図像)を描き現わします。

書かれるコトバはどこかポジティブな印象のものである以外には特に決まりは無く、描かれるピクトは家のふすまのウラの柄、アルバムジャケット、ファッション誌のグラビアの一部、おもちゃにプリントされていたドクロの柄などが多く登場します。「**見たいカタチとはまったくのオリジナルではなく、見たことあるカタチのすぐそばにあるイメージです**」と語る大和にとって、それらは日常で目にし、自身の感覚に引っかかっていたものに端を発したものであり、それらの図像は展示空間と向き合うなかで描く場所やサイズを吟味し、決定されていきます。

また、大和が『書く・描く』ものには密接な関わりがあるわけではありませんが、「**音楽に例えるなら、サウンドはキレキレで超絶カッコいいのに、それに反比例して詩の意味が恐ろしくダサかったりする。そのバランス感覚が、最高にカッコいいと思う**」と語るように、異なる属性(文字と図像)に内在する要素を感じ取り、ひとつの画面・空間において、危ういバランスを保って関わりあうことが意識されています。

大和にとって初個展となる本展では、ガラス張りによるパルクの空間特性を活かし、1月初旬より2週間以上の会場制作を経て、窓ガラスに「コトバとピクト」がインストールされています。アクリル絵具を塗り重ねた窓ガラスに、熱したハンダゴテによって「るんるん」や「どきどき」、宮沢賢治の「ポラーノの広場」の一節、エスペラント語が書きつけられ、ファッション誌にあったジャケットの柄、服のタグ、CDのジャケット、日食の図像などが混沌となっています。

ここではコトバはピクト、ピクトは空間に展開して一つとなって、鑑賞者の前に「ルミナスレッドの容貌」として存在しています。また、ガラスの持つ光の透過性を残した空間は、時間帯によって大きくその容貌を変化させます。

また本展では、これまでの作品に見られた紙やパネル、建築空間に鉛筆で「書く・描く」という絵画的なプロセスが、「彫る・削ぐ」といった、いわゆる彫刻的な要素を併せ持つものへと展開しています。それは、図像・空間へのマクロ的な視点とともに、ミクロ的には書かれたコトバの意味・印象だけでなく、彫られた文字のカタチ(彫り跡)の様相、あるいはその向こうの外界までを取り込んだ構造をつくり出しています。『書く・描く』ことで現われた空間を『読む・見る』うち、やがてそれぞれの行為や認識を超えた鑑賞体験ができるのではないのでしょうか。